

幼稚部での歌や手遊び

～初期の取り組みから考える～

杉山 砂寿

幼稚園教育要領の「表現」の領域では、感性を豊かにすることや、表現を楽しむことをねらいとしている。また、その内容では、様々な表現的な活動を楽しんだり、味わったりするという文章表現が多く記されている。幼稚園や保育園と比べ、歌や手遊びなどの活動は、聾学校幼稚部では少ないと感じているため、ここでは歌や手遊びに絞り、その導入から、発展を今までのクラスの指導から振り返り、その中で、どのように子ども達と楽しみ、味わってきたかについて考えていきたい。また、歌や手遊びが、子ども達にどのような効果、成長をもたらすのかについても考えたい。

キー・ワード：歌 手遊び 表現 イメージ 楽しい 音 踊り リズム

1 はじめに

幼稚園教育要領第1章には、『幼児期における教育は～中略～幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。』こと、第2章には、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」各領域のねらい、内容が示されている。そのねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならないと示されている。

幼稚部での活動は、生活と遊びが主体となり、自分から様々な物・人・出来事に興味・関心を向け、それらにかかわり、考え、感じ、心を動かし、あらゆる物事を結びつけ、気づき、覚え、それらを表現し、また様々な物・人・出来事などに興味・関心を向け・・・というサイクルを繰り返し、幼児は総合的に学習していると考えられる(図1)。歌や手遊びも、毎日繰り返して楽しむことの一つであるとすれば、それは幼児にとっては遊びであると捉え、聴覚障害幼児が、毎日の活動の中で、どのように音楽、リズムなどを楽しみ、興味や関心をもって活動に参加していくのかを考える。また、教師の側から、どのように楽しませ、興味・関心をもたせていくかという

部分にも注目していきたいと思う。特に3歳児で入学し、集団の生活に始めて入った時期に、歌や手遊びに興味や関心をたせていくにあたり、教師の配慮や工夫、子どもの変化、成長について見ていくことにする。

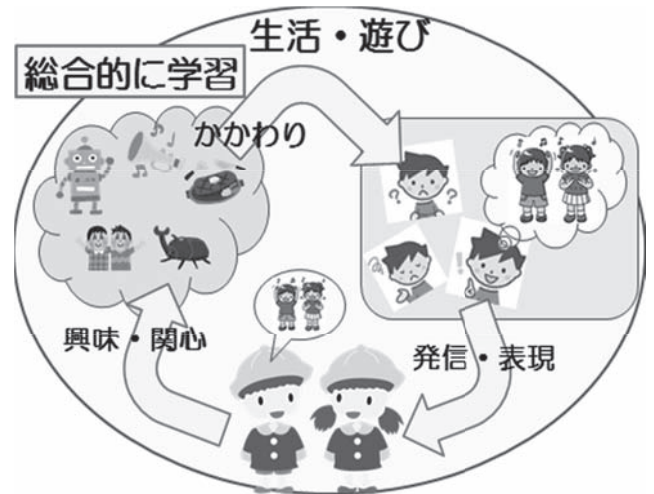


図1 幼児の学習サイクル

2 初期の取り組みから

(1) 興味・関心への導入

幼稚部へ入学したばかりの幼児は、音への反応がまだ確実ではない場合や、声を安定して出すことが難しい子どもも多くいる。そのため、ピアノ伴奏やCDの音源のみで歌や手遊びを楽しむことは難しい場合が多い。本研究では、そのような子ども達に対して、

どのようにして歌や手遊びに興味をもたせていくのかを考える。

歌や手遊びを選んだり、行ったりする時、「子どもが馴染みやすいもの」「繰り返しのメロディーや動きのもの」「単純なもの」「リズムがはっきりして明快なもの」「身体表現がしやすいもの」「遊びややりとりと結びつくもの」「季節感があるもの」「行事に関するもの」「視覚的にもイメージしやすいもの」などを考えている。また、実際に活動をする時には、「大人の楽しむ姿」「少し大げさに見せること」「テンポ感（速すぎたり遅すぎたりしない）」「はっきりと示すこと」「子どもの状態をよく見ること」「子どもの興味に合った教材」などを考えながら活動をしている。



図2 活動の様子

4～5月頃に子ども達と楽しむ「チューリップ」「おはながわらった」の歌を例に挙げる(図2)。季節を感じる童謡であること。テンポも良く、わかりやすい動きをつけることができること。また、周囲にチューリップなどが咲いている状況から、子どもとやりとりができること。教材が作りやすいことなどから、クラスで扱うことが多い歌である(図3)。

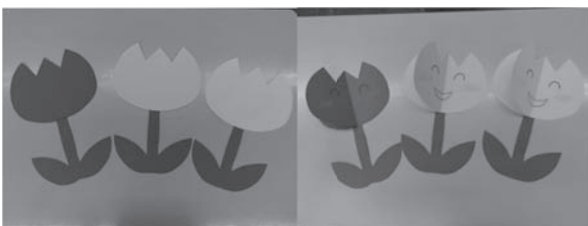


図3 お花がわらったに使用した教材の一つ

自作のDVDや教材などで子ども達の興味を惹き、教師が楽しげに見せることから始まり、「見ることを楽しむ」「動きを楽しむ」「真似を楽しむ」「リズムに乗って楽しむ」など、子どもの楽しみ方はそれぞれではあるが、どのような楽しみ方も認め、教師も一緒になって子どもが楽しいと感じている部分を共有していく。繰り返し行う中で、「何だか楽しい。」「またやりたい。」という気持ちをもたせていくようにするのが、導入の段階と考える(図4)。

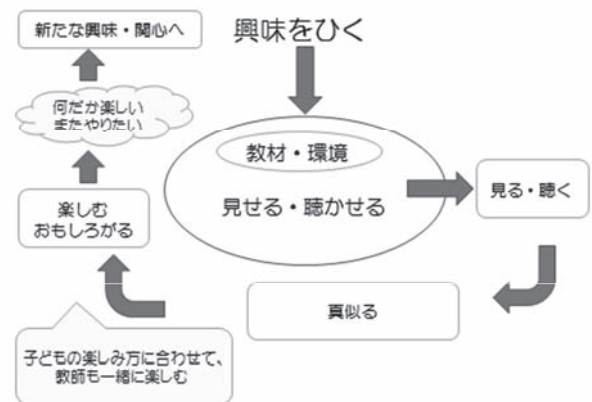


図4 子どもの興味の広がり

もう一つ、手軽にできる手遊びの一つである「ひげじいさん」を例に挙げる。簡単な動きで、子ども達がすぐに楽しめる手遊びの一つであること、動きが簡単で、すぐに覚えることができること、どこでもできること、様々なバリエーションで楽しむことができることなどから、ちょっとした時間を活用でき、繰り返し行うことができる手遊びである(図5)。



図5 ひげじいさんに使用した教材の一つ

この手遊びについても、図4に示した通り、見て

聞き、真似て、繰り返し楽しむことで、もっと楽しみたいという気持ちや、少しずつ変化させることで、新たな興味や関心へとつながっていくものとする。

(2) 繰り返して楽しむ

子ども達は、毎日繰り返し歌や手遊びを行う中で、動きを覚え、教師と一緒に楽しむようになってくる。また、その中で、自然に身体を揺らし、リズムに合わせてたり、動きに合わせて声を出したりする様子が出てくる。動きをつけながら歌や手遊びを行うことで、次の動きを予想していたり、タイミングを合わせられるように待っていたりする様子も出てくる。「やりたい」「もうっかい」「おしまい」など、自分の思いを表現する様子も出てくる。毎日、同じように歌や手遊びを繰り返すということは、わかるということにもつながるため、子どもにとっては、安心できる遊びの一つとなると考える。子ども達は、その遊び（歌や手遊び）を繰り返し楽しむ様になっていくと考える。

もちろん、子どもによって興味や関心の向けどころが違ったり、楽しめるようになるまでに時間がかかったりする子もいるが、みんなで同じことを行う楽しさを、繰り返し活動する中で、少しずつ育てていくことができる（図6）。

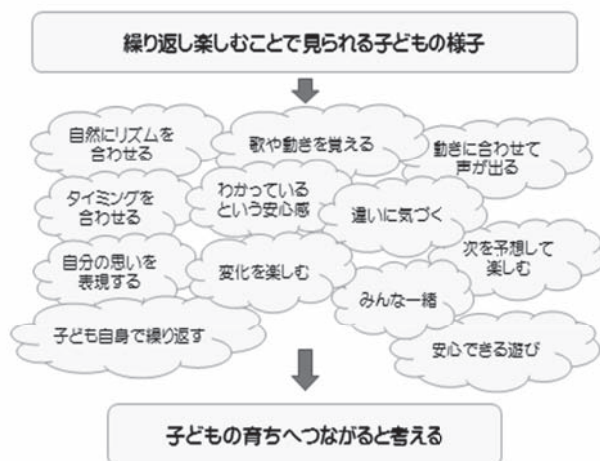


図6 繰り返し楽しむことで見られる子どもの様子

(3) 初期の段階での子どもの変化や成長

繰り返し歌や手遊びを行う中で、次のような変化

や成長が見られた。

- ・「見よう」「聞こう」という意欲が高まる。
- ・動きや歌を覚え、一緒に行おうとする。
- ・リズムをとるようになってくる。
- ・自然に声を出す様子が出てくる。
- ・自分の思いを表現するようになってくる。
- ・人とかかわりが増える。
- ・次の動きや、先を予想し、期待をするようになってくる。
- ・家でも同じように楽しむようになってくる。

その結果、歌いたいという意欲が高まり、歌うこと、手遊びをすることを楽しむ様子が増える。子どもにとっては、歌や手遊びを、他の遊びと同等に楽しんで行っているものとする。楽しい気持ちの高まりが、更なる興味・関心、意欲につながっていると考えられる。

幼児の活動は、生活と遊びが主体となり、自分から様々な物・人・出来事に興味・関心を向け、それらにかかわり、考え、感じ、心を動かし、あらゆる物事を結びつけ、気づき、覚え、それらを表現し、また様々な物・人・出来事などに興味・関心を向け～というサイクルを繰り返し、総合的に様々なことを学習していくことを考えると、歌や手遊びを通し、幼稚園教育要領第2章の「表現」の部分だけではなく、各領域が関連し合い、総合的に成長していくということが確認できる（図7）。

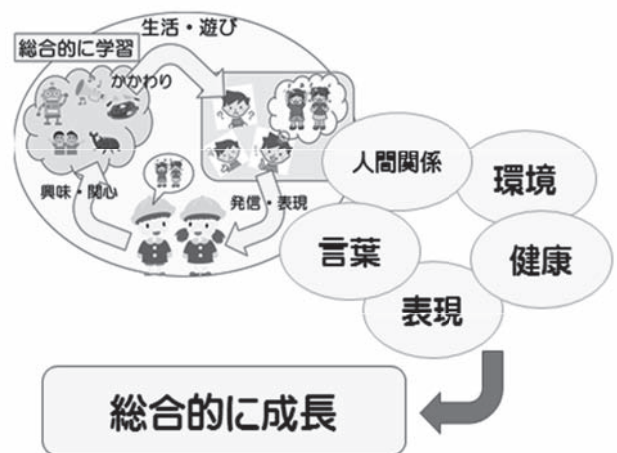


図7 総合的に成長

3 考察

今回は、初期の取り組みだけに焦点を当てたので、今後の育ちには言及していないが、幼稚部教育要領にある「環境を通し、総合的に指導する」ということをベースに、幼稚部3年間で、歌や手遊びを通し、どのような成長が期待できるのかについて考えた。

子どもにとって、歌や手遊びは遊びの一部であると考えるので、日常、自然な形でいつも歌や手遊びを扱うことを前提とする。子どもは、そのような環境の中で、自然に興味・関心を向け、見ること・聞くことから、真似ることを楽しんだり、おもしろがったりする。それを繰り返しながら、新たな興味・関心へつなげていく。そのような活動を繰り返していく中で、教師と信頼関係を築いていくことはもちろん、心の安定につながっていくと考える。また、自然に起こるやりとりの中で、見る、聞く態度を育て、動きを真似ることで、身体全体・足・腕・手、手指などの動かし方を少しずつ身につけ、感覚や器用さの成長を期待することができる。動きに合わせて声を出すこと(歌うこと)は、自然と発声を促し、発音の基礎となり、将来的には、発音指導へとつなげていくことができる。また、やりとりの中での口声模倣へもつなげていくことができると考える。リズムに合わせること、テンポよく歌うこと、踊ること、動きの緩急などを通し、リズム感を育て、くすぐられたり、決まった動きに即座に反応したりすることは、反射神経などの育ちも期待できる。また、覚えて繰り返し歌うこと、出てくる歌詞に興味をもちたり、イメージをもちたりすること、身体や手指などを何かに見立てて遊ぶことなどで、記憶力や想像力、先を予測して楽しむことなどにもつながると考える。集団で歌うこと、手遊びをすることは、みんな呼吸を合わせたり、リズムを合わせたりすることが必要となる。それらは、集団としての一体感を感じることができ、友達同士でやりとりをすることや、気持ちを伝え合うことへつながると考える。また、季節や行事の歌を歌うことで、情景を思い浮かべることへもつながる。そこには、必ず誰かとのやりとりが生まれ、歌や手遊びを繰り返す中で、あ

らゆるものに興味・関心を広げ、またそれらを繰り返し、総合的に様々な成長を促すことができると考える(図8)。



図8 考えられる子どもの成長

図8に示すように、歌や手遊びには、様々な学習の要素が含まれていると考える。実際にクラスで行う時に、子どもに期待できることは小さなことである場合が多いと思われるが、どこかの部分だけを指導したり、伸ばそうとしたりしても、どこかの部分が欠けていても総合的な指導にはなっていないと考える。様々な要素が絡み合い、子どもの成長に影響していると考えられる。

幼稚園教育要領に示されている通り、総合的に指導していくことを考えると、歌や手遊びに限らず、どのような活動、かかわりにおいても、聾学校幼稚部教員として、幼児ひとりひとりの全ての成長を意識したかかわりが、聾学校として幼児に言葉の力を身につけさせていくことにつながっているのではないかと考える。

【参考文献】

文部科学省(2008)幼稚園教育要領(平成20年告示).
 フレーベル館
 杉山砂寿(2016)幼稚部3歳児における子ども同士の
 かかわり合い～劇遊びを通して～. 筑波大学附属
 聴覚特別支援学校紀要, 38, 8-11